

学校名	光市立浅江中学校
-----	----------

1 学校の概要

校長名	木本育夫	児童・生徒数	342	学級数	14	教職員数	28
教育目標	<p>人権尊重を基盤とした「美しい心」と社会の変化に主体的に対応できる「知恵」を備え、心身共に健康で、気付き・考え・行動できる生徒の育成</p>						
学校の状況	<p>本校は、光市西部に位置し、住宅地域・商業地域が隣接する開けた地域である。温暖な気候で、冬の降雪も少なく、毎年、夏には虹ヶ浜海水浴場に多くの海水浴客が訪れる。</p> <p>本校区の浅江地域は1公民館・1小学校・1中学校で構成されており、地域のつながりは非常に強く、コミュニティがしっかりしているとともに、地域行事も大変盛んである。また、世帯数は5,000戸を超え、光市内では最も人口が多い。平成21年度から推進している「コミュニティ・スクール推進事業」は、浅江地域においては最適の事業となっており、学校と地域との絆がより深まっている。しかし、高齢化が課題となっており、コミュニティの継承・存続が危惧されている。</p> <p>生徒は、明るく素直で何事にもまじめに取り組む。特に学校行事に対しては、熱く意欲的に参加することができる。しかし、学習面や部活動等において、自分から進んで課題を掲げ、解決するといった活動においては、やや積極性に欠け、教員の指示を待つなど受け身である。</p> <p>また、近年本校においても、不登校傾向を示す生徒が増加してきた。こうした中、教職員は、「心のふれあいを基盤としたかわり続ける生徒指導」に重点を置き、教育相談や協力体制の構築や家庭訪問、関係機関との連携等を充実させる等の指導を行っている。</p>						
SWOT分析による長所・短所	<p>【長所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域とともに活動する行事が多く、生徒・教職員と地域住民と一緒に活動でき、「Win-Win」の関係が構築されている。 ○ コミュニティ・スクール推進事業が地域の理解・協力により大変スムーズに進んでいる。 ○ 地域住民が挨拶運動や交通立哨を積極的に推進するなど、学校に大変協力的である。 ○ 保護者の多くが本校の卒業生で、学校運営に対して理解がある。 ○ PTA活動が盛んで、各種行事において保護者が積極的に企画・運営を行う。 ○ 管理職（校長）が本校に在職経験があり、保護者との信頼関係が構築されるとともに、教育委員会経験も長く、あらゆるトラブルが迅速に対応できる。また、リーダーシップを発揮して、組織の力が最大限に発揮できるよう、ポイント毎に適切な指導助言をしている。 ○ 教職員に協調性があり、場の雰囲気が乱されることがない。 ○ 校務分掌にプロジェクト方式が導入され、かつ、教員一人ひとりの役割が明確化され、うまく機能している。 ○ 各プロジェクトの主担当教諭（ミドルリーダー）にリーダー性があり、推進役としての役割を十分果たしている。 						

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒指導面において、教職員間で常に共通理解が図られており、同じベクトルで生徒の指導に当たっている。 ○ 「あいさつ」・「掃除」・「人の話を聞く」という3つのチャレンジ目標に向かって、生徒・教職員が一丸となって取り組んでいる。特に、「あいさつ」については、誰に対しても気持ちよく進んで行っている。 ○ 全教職員に、各種研究指定校事業を積極的に推進したり、校内研修を活性化することで資質の向上を図ったりしようとする意欲がある。 ○ 教育委員会との連携が十分にとれており、校内研修会やケース会議などにおいて、指導助言を受けられる。 <p>【短所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 大きな問題行動は見られないが、時に、校外生活において反社会的な行動をとってしまう生徒が見られる。 ○ 1小1中の校区であるため、小学校時代から培われた人間関係が維持されやすいが、一方、負の側面が表に出ると、修復が難しい。 ○ 教職員は、学習指導・生活指導・部活指導等に熱心に取り組む反面、時間的なゆとりがない。 ○ 教員定数の関係により、一人当たりの授業時数が多く、負担が大きい。 ○ 校内研修で一人一授業公開を推進しているが、教職員全体で協議する時間の確保ができない。 ○ ミドルリーダーがしっかりしており、各プロジェクトがスムーズに推進されているが、それに頼る傾向が見られる。 ○ 地域からの学校に対するや苦情（クレーム）も時に見られる。 ○ 学校運営に対して批判的に捉える保護者がおり、時に苦情（クレーム）がある。 ○ 行事の精選ができず、授業時数の確保に苦慮している。 ○ 生徒及び保護者に対して、進路指導・進路情報の提供が不十分であるという評価を受けた。
研究テーマ	地域社会の持つ力を学校運営に生かせる学校づくり

2 1年間の実践研究の取組状況

22年 4月	企画調整会議	新しい学校組織の確認と適切な配置 実践研究に係る年間計画の確認
	第1回プロジェクト部会 第1回企画推進委員会 第1回学校運営協議会	役割分担と各プロジェクトの計画 役割分担と各プロジェクトの計画の検討 学校運営方針及び実践研究課題の提案・協議・承認、 各プロジェクトの計画の検討
5月	第1回SWOT分析 自己評価検討委員会	学校の内外環境の分析 学校評価に係る年間予定及び評価項目の検討
	第2回プロジェクト部会 第2回企画推進委員会	各プロジェクトの進捗状況の検討と修正 各プロジェクトの進捗状況の報告と検討
6月	第2回学校運営協議会 連絡協議会①（県）	各プロジェクトへの指導助言
	前期学校評価	対象：生徒・保護者・教職員

10月	第3回プロジェクト部会	各プロジェクトの進捗状況の検討と修正 前期学校評価結果の検討
	第3回企画推進委員会	各プロジェクトの進捗状況の報告と検討 前期学校評価結果の検討
	第3回学校運営協議会	各プロジェクトへの指導助言 学校評価結果に対する指導助言
	実践研究に係る講演会（県） 連絡協議会②（県）	
11月	後期学校評価	対象：生徒・保護者・教職員
2月	第4回プロジェクト部会	各プロジェクトの振り返り 後期学校評価の検討
	第4回企画推進委員会	各プロジェクトの振り返り 後期学校評価の検討
3月	第4回学校運営協議会	各プロジェクトの総括 学校評価結果に対する指導助言 来年度へ向けての提言（学校運営方針等）
	企画調整会議	本年度の総括 来年度へ向けての組織・運営の見直し

3 実践研究の内容と成果

(1) 組織力の強化に係る取組

ア プロジェクト方式の継続、効果の検証

- (ア) 年度当初に、分掌部会・プロジェクト部会を開催し、新しい組織での役割分担や活動計画を確認するとともに、各プロジェクトを実践した。
- (イ) 前後期に各1回、この方式の検証と見直しを行った。
- (ウ) 学校評価実施後、マネジメントサイクルを意識して改善を図った。

【成 果】

- 校務分掌を従来の6部構成から3部構成にし、それぞれが主体となるプロジェクト方式をとったため、リーダーの位置付けや任務が明確となり、組織の活性化が図られた。
- 教育研修活動部会（3部会）においては、特にコミュニティ・スクール推進事業との関わりがあり、定期的にプロジェクトごとの外部委員（地域代表）との協議会を設定したことにより連携が深まり、信頼関係を構築することができた。
- 教職員の中に、各プロジェクトを推進しているという自覚と意欲が出た。
- 中期的な目標を設定し、努力すべき内容の共有化・重点化を図ることができた。

【課 題】

- 従来の分掌の中に、どのプロジェクトとも関わりがないもの、逆に、複数のプロジェクトと関わるものがあり、効果的に機能していないものがあり、修正が必要である。
- 校内協議会が十分にとれなかったが、各プロジェクトごとにプロジェクトが順調に進んでおり、逆にその存在意義が問われている。

イ 「企画調整部」の位置付け・役割の確認と設置効果の検証

- (ア) 企画調整部は、主要な各部及び各学年の主任が中心となって組織した。
(イ) 所属教職員は、各行事及び取組の運営方針について検討するとともに、各種校内委員会（運営委員会・就学指導委員会・拡大生徒指導委員会等）にも所属するようにした。

【成 果】

- 議案の事前検討がなされ、職員会議のスムーズな進行ができた。
- 組織ごとの横のつながりができ、リーダーとなる教職員の意識・意欲の高まりが見られるようになった。

【課 題】

- 提案議案を十分に協議するだけの時間が確保できないため、深く追究するまでには至っていない。

ウ プロジェクトリーダー（ミドルリーダー）の位置付けと役割の明確化

- (ア) 3つのプロジェクト部会（学校運営・生徒活動・学力向上）のリーダーは教務主任・生徒指導主任・研修主任が担当した。
(イ) 円滑な組織運営のため、定期的に連絡会議（運営委員会）を開催し、各部会の進捗状況について情報交換を行った。

【成 果】

- 各部会における協議もリーダーが中心となって行われており、教員間の協力体制が整った。
- 教員にリーダーとしての自覚が生まれるとともに、協働を意識した取組ができた。
- リーダーが教員の意見集約や連絡・調整を積極的に行った。

【課 題】

- 定期的な連絡会議を開催する時間の確保が難しい。
- 時間の厳守など、行動規範を明確にした日常の業務を行うことが難しい。

(2) ICT活用等による情報共有、業務改善に係る取組

ア 校務の情報化による質の改善とゆとりの創出

- (ア) 校内LANに共有フォルダを設け、教員同士の情報の共有をこの共有フォルダ上で行い、文書整理・校務処理・成績処理の迅速化を図った。
(イ) 情報化を推進するための校務分掌を組織し、適切な人材配置を行った。
(ウ) 各種情報発信資料・研修資料等を共有フォルダ上に提示し、教職員全体の資質の向上を図った。

【成 果】

- 起案文書・書類を事前に共有フォルダ上で提示し、加除訂正を行うことで校務の迅速化を図ったため、子どもと向き合う時間を生み出すことができた。
- ICT分野を担当する教員を各学年に配置し、積極的な情報化を図ったため、種々の情報が整理された。
- 成績処理・ホームページなどの情報発信・各校務分掌・各プロジェクト等のフォルダを作成し、教職員が常に情報を共有できる状態にしたため、協議がスムーズに進んだ。
- 生徒指導・学習指導・キャリア教育等に係る資料を教職員で共有し、意識してそれらを閲覧することにより、教職員個々の資質の向上が図られた。

【課 題】

- 情報の更新が常に必要であり、担当教諭の負担が増えることが懸念される。

(3) 地域やPTAとの連携、外部人材の活用に係る取組

ア コミュニティ・スクール推進事業を支える学校組織の在り方

- (ア) 3つのプロジェクト部会のうち、学力向上部会をコミュニティ・スクール推進事業の中に位置付けている。それをさらに3つの部会（心の教育・確かな学力・体力づくり）に分け、それぞれの部会で地域との連携を意識しながら、プロジェクトを推進した。
- (イ) 教職員全員が3つのプロジェクトのいずれかに所属する組織とした。

【成 果】

- 教職員はこの3つの部会のいずれかに入っており、このコミュニティ・スクール推進事業を常に意識できたため、各行事における協力体制が構築された。
- 各部会の取組について、所属教職員でアイデアを出し合い協議を進めたことにより、教職員間の共通理解・共通実践ができた。
- 部会ごとの地域住民との協議会にも教職員が参加することで、地域住民との信頼関係が深まった。

【課 題】

- 地域との協議会は、年8回、すべて夜間に行われており、勤務時間との関係に配慮を要した。
- 学校運営協議会及び、地域と連携した各行事を運営するために必要な諸経費について、来年度以降の捻出が課題である。

イ 地域と連携した生徒育成の在り方

- (ア) 地域や保護者に学校や生徒の様子を効果的に伝え、学校に対する理解と協力を得た。
- (イ) 学校評価システムを地域と学校とを結ぶコミュニケーションツールとして活用した。
- (ウ) 生徒指導上の問題の未然防止のため、地域パトロール・街頭補導等を行った。
- (エ) 地域住民参加型の「あいさつ運動」を毎月実施し、爽やかなあいさつを交わした。
- (オ) 青少年健全育成事業（地域と共催）として、本校出身の先輩を招き、講話（在校生へのメッセージ）をお願いした。

【成 果】

- 行事などをとおしての連携が十分にできているため、お互いの信頼関係が構築された。
- 地域住民と生徒、地域住民と教職員との関係がより良好になった。
- 学校の自己改善力が高まった。

【課 題】

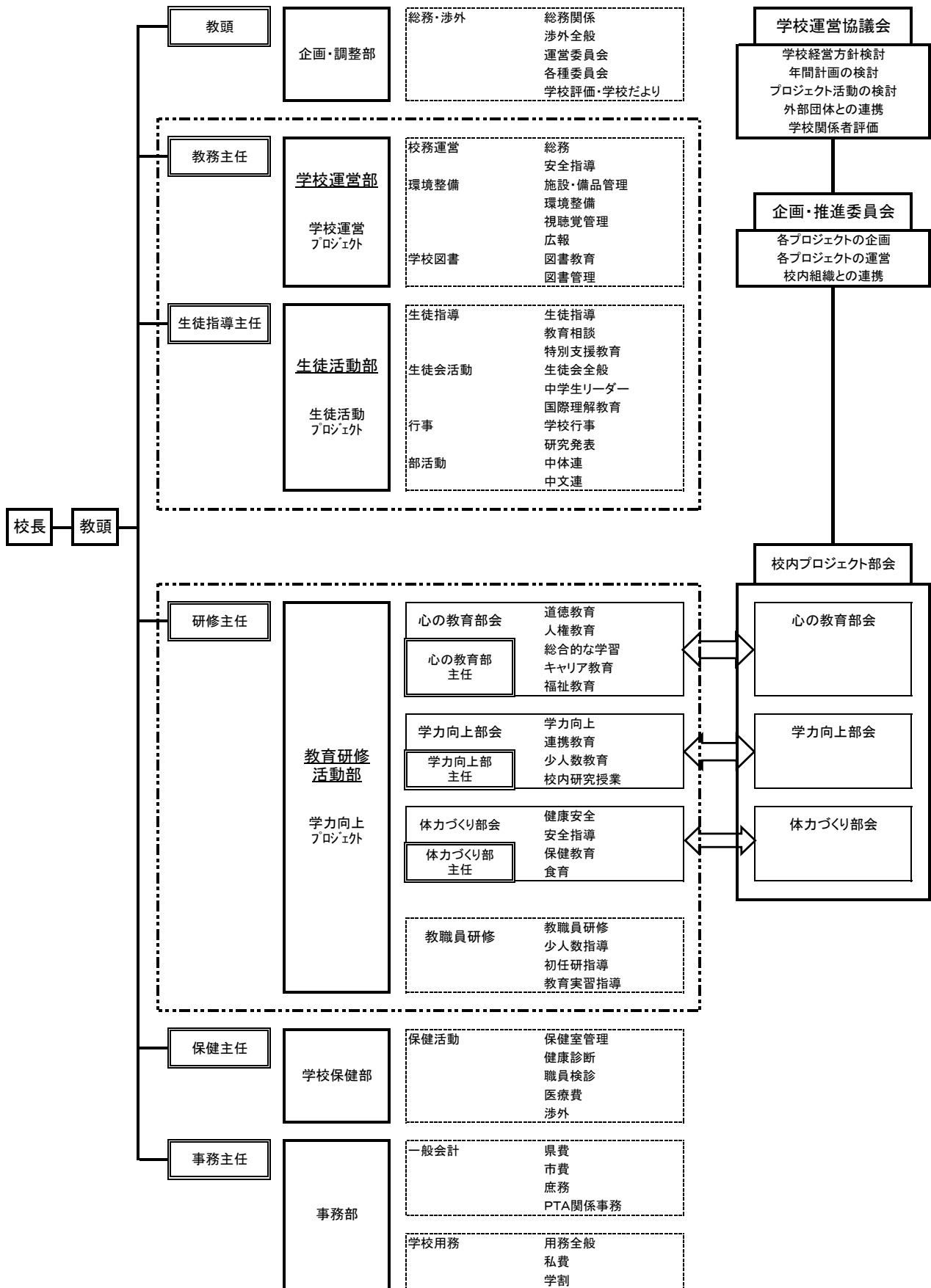
- 生徒指導上の諸問題（反社会的行動・非社会的行動）に係る地域との連携が十分にできていない。

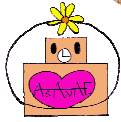
4 今後の取組内容

- (1) 各プロジェクトリーダー（ミドルリーダー）を軸とした組織運営により、教育活動をさらに活性化させる。
 - 中期的な目標を設定し、課題の共有化・重点化を行う。
 - 機動力を生かした組織編制を常に模索する。
 - プロジェクトリーダーを中心に、協働・連携を意識した取組を行う。
- (2) 学校教育目標との関連を常に意識した校務分掌を編成し、状況に合わせて検討・改善・見直しを行う。
 - 円滑な組織運営のため、運営委員会を定期的に行い、情報の共有化を図る。
 - 常に校務分掌の見直しを行い、組織の再編を図る。
- (3) 地域や保護者と学校の双方向の連携を生かし、生徒を育成する。
 - 「コミュニティ・スクール事業」を、指定終了後も本校独自のスタイルで継続していく。
 - 学校だより、学年だより、コミュニティ・スクールだより、進路だより、ホームページ等を活用し、積極的に学校や生徒の様子を伝え、学校に対する理解と協力を得る。
 - 学校行事・地域行事をまとめた行事予定表を作成し、生徒の地域行事への積極的な参加を呼びかける。
- (4) 学校評価を生かし、信頼される学校づくりを目指す学校経営を行う。
 - 評価指標の設定と数値化により、達成状況の把握と改善に生かす。
 - 保護者・地域・教職員の共通理解を図る場として、魅力ある学校づくりのための学校運営協議会を機能させ、教職員以外の学校関係者評価を行うことで、学校評価（自己評価）の客観性を高める。
- (5) 校務の情報化により質の改善・向上を図ることで、生徒と向き合う時間を創出する。
 - 精選して生み出した時間を、教育相談や研究授業等に充てる。

平成22年度 光市立浅江中学校 校務分掌

コミュニティ・スクール推進事業





光市立浅江中学校 “あさなえネット”だより

第3号 平成22年10月12日 発行

秋空高く 爽やかな季節となりました。保護者の皆様、地域の皆様、いかがお過ごしでしょうか。朝夕はめっきり冷え込み、周りには風邪をひいておられる方がちらほら。



さて、“あさなえネット”の活動がいよいよ本格化します。学力向上・心の教育・体力づくりの各部会が地域との連携・協働をめざして行事を企画しました。すでに、心の教育部会は、“敬老と福祉のつどい”を終え、地域の皆様に喜んでいただきました。それらの活動を紹介するとともに、今後の予定をお知らせいたします。



浅江敬老と福祉のつどい

9月19日（日）に開催された「浅江敬老と福祉のつどい」において、本校生徒が育てた花と浅江小の児童が書いたメッセージをプレゼントしました。今年の夏の猛暑の中、必死に耐えたマリーゴールドなどが立派に生長し、無事プレゼントすることができました。お年寄りに大変喜んでいただけたので、生徒たちは満足げな表情でした。

なお、竹の切り出しに御尽力いただいた『浅江やろう会』の皆様には厚く御礼申し上げます。御支援ありがとうございました。

当日は本校吹奏楽部が曲を演奏し、お年寄りの皆様に大いに楽しんでいただけたようです。その時の様子を御紹介します。



あさなえネット旗作成中！



あさなえネットのイメージキャラクター『つながりん』を象ったあさなえネット旗が完成間近です。

今後は行事を行うたびにその旗を掲げ、「地域とつながる浅江中」をスローガンに活動していきたいと思っております。そして、今後とも保護者・地域の皆様と知恵を出し合い、未来を担う人材を育成していきたいと思っております。御支援の程よろしくお願ひいたします。

お知らせ

浅江中恒例の行事「ようこそ先輩」は、次のとおり開催されます。どうぞ御来校ください。

12月13日（月）
午前（時間未定）

朝香 卓也 氏
首都大学東京 教授

年賀状のデザインづくりをしませんか？

学力向上部会では、別紙御案内のとおり、本校のパソコンを使った年賀状のデザインづくり教室を開催します。来年（卯年）の年賀状と一緒にデザインしませんか。本校教員とパソコン部の生徒がお手伝いしますので、ぜひお気軽に御参加ください。

希望される方は、別紙申込用紙に記入され、自治会長様へお渡しください。

なお、あくまでもデザインづくりです。デモ刷りはできますが、年賀状への本印刷は御家庭でお願いいたします。



また、学力向上部会では、10月31日（日）に開催される本校文化祭の合唱コンクールに向けた取組も進めております。

音楽（合唱）の専門家である寶迫先生（浅江地区在住）、鳥上先生（周南市在住）にクラス合唱の指導や当日の審査をお願いしました。まさに、地域の貴重な人的資源の活用です。

文化祭は30日（土）・31日（日）の2日間開催されます。31日（日）の12時から友愛セール（遊休品バザー）もあります。地域の皆様、ぜひ御来校のうえ、御観覧ください。よう御案内申し上げます。

学校評価を実施しました

今年度も学校運営の改善を図り、信頼される開かれた学校をめざして、学校評価（前期）を実施しました。

生徒・保護者へのアンケートに加えて、教職員には自己評価を実施し、その結果を分析しております。結果及び、改善に向けた方策については、第3回学校運営協議会に提案し、御意見・御指導をいただく予定です。

地域の皆様には、浅江中のホームページに掲載しますので、御覧ください。何かお気づきがありましたら、お聞かせください。

生徒の自己評価で最も高かったものと低かったものを紹介します。家庭学習については、学校だけではなく、家庭との連携が必要と考えます。

今後の予定

10月12日（火）

第3回企画推進委員会

18日（月）

第3回学校運営協議会

10月30日（土）・31日（日）

浅江中学校文化祭

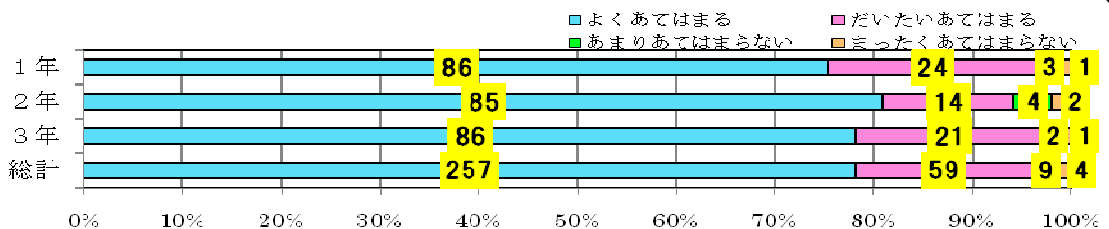
11月6日（土）9:00～11:00

年賀状デザインづくり教室

11月初旬～

早朝かけっこクラブ開始

朝読書への取り組み



平日の家庭学習時間

